前号を読んで

東京キャンパスの有効利用

伊藤　眞
人文社会科学研究科教授

筑波フォーラム 71 号（特に特集記事）を読んで感じたことは、筑波大学の各研究科が、社会のニーズに合わせた教育をより充実させるために、さまざまな企画を積極的に行っているということである。私は現在、学類教育では人文学類、大学院教育では人文社会科学研究科に所属している。筑波大学の大学院重点化に伴い、大学院教育がクローズアップされることは当然のことであろうが、それにより、大学院でより高度な専門教育を受けるための前提となる学類教育の重要性が減ることはあるまい。ところで、より充実した教育を行うためには、学類にせよ大学院にせよ、優秀な学生を集めることが重要であることは言うまでもない。例えば大学院については、本学の学類学生の中から大学院に進学する学生を育てることは当然であるが、他大学から本学大学院に入学する学生を増やすことも必要である。そのためには様々な方策が考えられるが、手始めとして、他大学の学生を対象とした大学院説明会を行うことが考えられる。その場合、筑波キャンパスだけではなく、東京キャンパスで行うことも効果的であろう。すでにいくつかの専攻では大学院説明会が行われているようだが、単にインターネットからの情報だけではなく、本学のスタッフと直接、話をすることも、本学大学院希望者にとっては貴重なことであろう。さらには、公開講座を開設したり、文系大学院の授業（の一部）を東京キャンパスで行う可能性についても検討する価値はあると思われる。その場合、つくばキャンパスでの授業カリキュラムとの調整などクリアーすべき問題も決して少なくないが、つくばと比較し、社会人も含めて、大学院教育の潜在的需要がはるかに大きい東京で、しかもロケーションも申し分のない東京（大塚）キャンパスを、文系の大学院教育のためにも、より有効に利用することを考えてみる必要があろう。TX が開通し、東京とのアクセスが飛躍的に向上したこと考えても、東京キャンパスの利用価値は以前にも増して大きくなっている。大学を取り巻く環境が、今後一層厳しくなること考えると、つくばで学生を待つだけではなく、東京キャンパスを新たな視点から、より柔軟に活用すべきだと思う。

（いとう　まこと／文芸言語）